

# 『竹島問題に関わる調査研究 最終報告書』

## 「西欧製作図の分析」に対する批判

金貞淑（嶺南大学校民族文化研究所）

### 目次

1. 序文
2. 日本報告書「西欧製地図の分析」に対する検討
3. 西洋地図での独島認識
4. 結論

### 1. 序文

独島について絶え間なく問題を提起してきた日本は、2008年に入りますますその態度を強くしている。一部右翼傾向の新聞でのみ扱われていた独島記事等が、比較的穏健だという毎日新聞等でもしばしば掲載されるに及んだ。ついに日本政府は学生らが学ぶ教科書に独島を日本領土であると載せるつもりだと公然と宣言して出た。しかしこれより先立って2007年、日本は下條正男をはじめとする10余名が共と『竹島に関する調査研究 最終報告書』(以下『竹島問題に関する調査研究』と称する)を出版した。<sup>1</sup> また日本は2005年に既に、1907年に出版された『竹島及鬱陵島』を複製印刷したことがある。<sup>2</sup> このような一連の動きはまるで日本が『竹島問題に関する調査研究 最終報告書』によって独島問題を結論づけようとしていると言わざるをえない。これに本嶺南大付設独島研究所では、この最終報告書を取りかわして検討するセミナーをしてきた。<sup>3</sup>

この報告書では「絵図・地図を通して見た竹島問題」という章が膨大な分量で収録されている。その中では古代出雲歴史博物館専門学芸員である岡宏三が書いた「島根県立古代出雲歴史博物館所蔵竹島関係地図」と島根大学法文学部・歴史地理学部の船杉力修が書いた「絵図・地図からみた竹島( ) - 付 鬱陵島調査報告」が膨大な分量で掲載されている。その中で岡宏三の文は古代出雲歴史博物館が所蔵している

<sup>1</sup> 竹島問題研究会、『竹島問題に関する調査研究 最終報告書』, 日本, 2007, 208頁, ウェブサイト <http://www.pref.shimane.lg.jp/soumu/web-takeshima/takeshima04> にも全載されている。

<sup>2</sup> 奥原碧雲, 『竹島及鬱陵島』, 松江市, Harvest, 122頁  
この本の翻訳・批評書がまもなく出版される予定である。

<sup>3</sup> この結果等は次のように論文として発刊され、その相当数がこの本に掲載された。

\_\_\_\_\_, 『竹島問題に関する調査研究 最終報告書』に引用された日本の江戸時代 独島文献研究』, 『人文研究』55, 2008.12

\_\_\_\_\_, 『日帝時代 鳥居龍蔵の目に映った鬱陵島』, 『独島研究』4, 嶺南大学校独島研究所, 2008.6

\_\_\_\_\_, 『「竹島考証」の史料歪曲 - 「韓国側引用書」を中心に - 』40, 韓国日本文化学会, 2009.2

\_\_\_\_\_, 『独島強奪をめぐる詭弁の虚構性 - 竹島問題研究会の明治時代資料に対する研究を中心に - 』, 『独島研究』4, 嶺南大学校独島研究所, 2008.6

\_\_\_\_\_, 『韓国の古地図に現れた独島認識に関する研究 - 船杉力修の韓国古地図分析に対する批判を中心に - 』, 『人文研究』55, 2008.12

\_\_\_\_\_, 『独島領有権の日本的論理啓発の類型』, 『日語日文学』36, 大韓日語日文学会, 2007

\_\_\_\_\_, 『「竹島経営者中井養三郎氏立志伝」の解釈誤謬に対する考察 - 竹島問題研究会の「最終報告書」批判 - 』, 『日語日文学』40, 2008.11

保坂祐二, 『「三国通覽輿地路程全図」と「伊能図」の中の独島』, 『日本文化研究』28, 東アジア日本学会, 2008.10

\_\_\_\_\_, 『塚本孝の“サンフランシスコ平和条約中における竹島の取り扱い”に対する批判的研究 - 2007年日本の竹島研究会の最終報告書分析』, 『日文研究』55, 2008.12

独島関係地図 8 篇を紹介した文だ。しかし船杉力修が執筆した「絵図・地図からみる竹島( ) - 付 鬱陵島調査報告」はこの報告書 103 頁から 181 頁に及ぶ長い文だ。この文は、1. 韓国側製作絵図の分析、2. 西欧製作地図に対する分析、3. 日本で製作された絵図の分析で構成されている。

地図というものは作成する目的や時期によって収録する情報の内容が違ってくるものであり、地図が製作された当時の人らの認識体系を確認するものであって、正しく領土を表示するものではないといえる。<sup>4</sup> 筆者はこの点を十分に認めているが、日本で地図を持って領土を主張することも妥当でないうえに、その地図分析自体も正確にできなかったという点は注意を注がざるを得ない。この中の韓国側地図批判に対する文は既に\_\_\_\_\_が分析をした。<sup>5</sup> それゆえ本稿は『竹島問題に関する調査研究』132 頁から 137 頁に掲載されている「西欧製作地図に対する分析」について検討しようと思う。

“西欧の地図に今の竹島が記載されたのは、19 世紀中期の西欧の測量成果に基づいた地図が製作されてからであり、その以前には記載されなかった。于山島の表記は朝鮮の絵図と同じで、今の竹島を表記したのでなく、また西欧地図が今の竹島を朝鮮領として表記したのではない”と結論づけているこの報告書は<sup>6</sup>その分析の前提になる認識がかなり歪曲されている。また 2007 年に報告書を出版しているにも関わらず、まさにこの主題に関する先行専門書等を全く検討せずに結論を出している。

西洋古地図等を通してみた独島問題に関する先行研究者の中で李鎮明は独島に関する西洋の古地図等を膨大に収集し、各地図が製作された経緯と作家およびその内容を詳細に報告した。<sup>7</sup> そして\_\_\_\_\_と\_\_\_\_\_が自分たちが集めた資料等を中心に最近『西洋古地図を通して見た韓国』を出版した。<sup>8</sup> その他、独島を中心に西洋地図を検討する文が多数ある。しかし船杉力修はこのような先行研究等を見なかった。それだけでなく、地図の分析姿勢もかなり偏狭である。

したがって本稿はまず日本報告書を詳細に分析するのである。そしてその報告書に利用された地図を検討して、果たして日本側の研究者が主張した内容が事実であるかを確認するのである。また、この地図が西洋人が描いた地図であるため西洋各国と日本との接触関係を調べていかなければならないのである。加えて韓国の西洋接触状況と比較して西洋人の両国に対する理解を調べながら地図を分析しなければならないのである。西欧が世界の尺度になることはもちろんない。単に西欧の地図に出てきている程度を調べるといえば、日本と韓国がどのように西欧と接したのかを調べながら地図を見なければならないのである。そうしてから西欧地図の中には果たして独島がどのように登場しているのかを分析するのである。

まず地図の意味と役割を調べて、日本で提示した地図解釈を再検討して、そのほかに出てきている西欧地図等を総合的に検討しようと思う。この作業を通して我々は西欧地図を分析する日本の研究者らがもっている論理上の誤謬を確実に知るようになるのである。

<sup>4</sup> 地図検討に対する慎重性は全篇の文で論議されている。

\_\_\_\_\_ 他, 『独島問題の再照明』, 『韓国学報』24, 1981, 200-229 頁

\_\_\_\_\_ , 『韓国古地図発達史』, ソウル, \_\_\_\_\_, 1999 頁, 序文

\_\_\_\_\_ , 『鬱陵島・独島の歴史地理学的考察 - 韓国古地図で見る鬱陵島と独島』, 『北方史論叢』7, 2005, 7-46 頁 等

<sup>5</sup> 本稿 注 3 参照

<sup>6</sup> こういった前提は独島研究初期に日本で流行したが、日本内でも批判論が起きて既に久しい。(崔長根, 『日本の竹島・独島歴史研究 現況と争点』, 『東北歴史論叢』18, 東北歴史財団, 2007, 7-37 頁 参照) 本稿は特に地図でみる原稿のため、日本製作地図中で川口常吉らが製作した「五畿八道朝鮮国細見全図」(1874)にも于山島が表示されており、「朝鮮国細見全図」(1873)と関口備正の銅刻「朝鮮與地全図」(1875)にも于山島の\_\_\_\_\_だといえる方山島等が現れていることを指摘しておく。(金貞淑, 『独島に対する歴史・地理的認識』, 『独島研究』創刊号, 嶺南大学校独島研究所, 2005, 1-43 頁参照)

<sup>7</sup> 李鎮明, 『西洋資料で見た独島』, パリ, P.A.F., 245 頁

\_\_\_\_\_ , 『独島・地理上の再発見』, ソウル, \_\_\_\_\_, 248 頁

\_\_\_\_\_ , 『西洋資料に現れた独島』, 『人文研究』19, 誠信女子大学校人文科学研究所, 127-147 頁

<sup>8</sup> 行政自治部国家記録院, 『西洋古地図を通して見た韓国』, 大田, \_\_\_\_\_, 2007, 115 頁

## 2. 日本報告書 「西欧製作地図について分析」について検討

船衫力條は西欧地図を調査、どんな方式でこれらの島が描かれているのか分析をしてみたと言った。その資料集には古地図集として出版された本のうち、秋岡コレクションの中の「日本古地図集成」及び「日本地図大成」に収録された繪圖と大阪大付属図書館ホームページに公開している“電子展示・西洋古版・アジア地圖”を資料として、最終的に隠岐諸島・鬱陵島・独島が記載された日本、及びアジア地図74点を分析したと言う。そして、その分析結果を「西欧製作地図について分析」の別表2で整理した。<sup>9</sup>

筆者はこれらの地図とその他独島が描かれた西欧地図を検討した。船衫力條が調べた大部分の地図は既に大阪大学図書館、及び大部分の日本サイトに掲載されている。一方で、韓国側が提供している地図は東北亜歴史財団と独島博物館ホームページに多数提供されている。これらにより、慶熙大学が所蔵している西洋古地図を通じて西洋の地図を調べた。

船衫力條は韓国側で西洋地図を通して西洋地図が独島を韓国領だと主張しているが、これは誤った事であると主張している。彼は韓国側からは、d'Anville の「朝鮮圖」に Tching-cha-Tao（于山島、西側）と Fanling-tao（鬱陵島、東側）と言う2つの島が描かれている事から、西欧で作製された繪圖を根拠として独島は韓国領だと推定しているが、これは誤りだといっている。<sup>10</sup> 彼は鬱陵島と独島が西欧地図に出てくる事になった過程が間違っていたとしながら、西洋地図が独島を描き始める過程の間違いを探し出そうとしているようだ。

彼は、試作しながら、川上が書いた1966年の文章を引用して、次のような前提を敷いている。すなわち、1779年(d'Anville が描いた『中國地圖帳』に収録された「朝鮮圖」には Tching-cha-Tao（西側）と Fanling-tao（東側）の2つの島が出てきているが、前者は‘于山島’を誤読した千山島の中国音で、于山島、鬱陵島の2島説を任意に地図上に表記したことにすぎなくて、これは、韓国の古文献にある于山島と鬱陵島を其々別個の島とみる2島説を地図上に表記しただけだが、この後この地図がヨーロッパで作製された地図に大きな影響を及ぼしたと主張した。彼は于山島と（鬱陵）島を同じ島であると前提している。

また船衫力條は、1787年フランスが今の（鬱陵）島を発見すると、（鬱陵）島は発見者ダジュレの名前が付けられ地図に登場する事となって、この後、1789年英国船舶が同じく（鬱陵）島を発見して船の名前を取って Argonaut 島としたが、正確な測量が為されず、実際よりも北西側へ測量して、今の（鬱陵）島が地図に2つ描かれる事になったと説明した。そして、彼は引き続き述べるところでは、シーボルトは日本地図とヨーロッパ地図を比較、1840年の日本地図にアルゴノート島を竹島と、ダジュレ島を松島と間違っただけで、その後の地図には、この間違っただけの認識を根拠として地図が作製されてしまったと見た。彼はこれに加え1849年フランスが今の竹島を「発見」して、船舶名を引用しリャンクール島と呼ぶこととなると、アルゴノート島（竹島）（松島）リャンクール（Liancourt）島と3つの島が描かれる事となって、この後アルゴノート島（竹島）は存在していないという事が明らかにされ、1900年代足を踏み入れた（松島）・リャンクール島だけが描かれる事になったと定理している。<sup>11</sup> すなわち西洋地図に独島が出てきた過程は、とても不正確な過程を経たという結論を持って作業を始めた。

<sup>9</sup> 竹島問題研究会 前の報告書 136-137 ページ

<sup>10</sup> 竹島問題研究会 前の報告書 132 ページ

<sup>11</sup> 竹島問題研究会 前の報告書 132 ページ

そしてそれぞれの地図を比較しながら自分の主張を裏付けようとした。ところがこの報告書には色々と問題がある。ひとまず分析資料を選定した地図の公平性のよしあしである。彼は、どんな理由からなのか隠岐諸島が西洋地図に出てき始めた16世紀中期の地図から始めて1874年までの地図を分析対象とみなしている。彼は、その研究対象となる時期を、国境が未だ未確定な時で、国境が描かれていない19世紀後半までに決めたと書いた。

どのような基準で、分析対象となった地図を選定したのかどうかは理由が明らかになっておらず確実ではないが、彼の分析対象から除外された地図が多い。1820年頃、フランスで刊行された「海左全図」(金大建)の朝鮮全図(1846)や<sup>12</sup> ダルレの「朝鮮天主教会史」に添付された地図(1874)等、多くの地図がその分析対象から除外されていて、船衫力條の地図選択に問題が有ることを示している。<sup>13</sup>

その上、彼が選択した地図の下限を1874年に決めた基準は更に問題となった。彼は国境線が表示されていない時期までも分析対象としたと言うが<sup>14</sup> 恐らくこの時からは国境線が表示されるために、それ以前までだけを論議したという意味であるらしい。ところで、これ以後、多数の地図には独島が韓国の土地だと表示されている。例をいうと、1875年、佐田白茅、並びに岸田キンコの「改正新撰朝鮮全図」、1886年、森琴石の「大日本海陸全図 付 朝鮮琉球全図」の部分図の表である「朝鮮国全図」、1894年、中国上海で製作された「朝鮮與地図」、1895年ドイツ人(フォン オジオ)の著書韓国に添付されている「朝鮮全図」、1906年、(カルリ)の著書極東の戦争に添付された地図である「朝鮮地図」等にはウルルン島と独島がはっきりと韓国領土となっている島々である。<sup>15</sup> したがって彼はこのような地図をわざと除外したという非難を免れないだろう。

船衫力條の、もう一つの弱点、各島の名称が時代に沿って変化したと言う事実だ。彼は于山島が鬱隆島と称したと誤解していて、更に日本では初期には鬱陵島を竹島と、独島を松島だと呼ばれた史実等の( ? ) 名称変化についての考慮が欠如していた。

論議を明確にする為、本項では船衫力條が作製した図表を全部翻訳して提示し、これを中心に言及してみようと思う。元来報告書の図表にはカタカナでだけ表記された西洋人の名前が多かった。これが前に既に提示されていた為にカタカナで書いたものでなく始めから1回しか出てこない人であるのにカタカナしかない場合もあり、更に前にはカタカナで名前が出てきて、後にはローマ字表記で書かれている場合があり一致しないので筆者は可能な限り西洋ローマ字化してその根拠を主に書き入れておいた。

<sup>12</sup> 地理学者 マルトー・ブロンがこれを縮小して1855年「パリ知里学会誌」へ掲載した。「金大建の朝鮮全図」「韓国教繪史の探求」韓国教会史研究所 ソウル1982 277-297 ページ参照

<sup>13</sup> イ・ジョンミン 「独島、地理上の再発見」1999 ここに船衫力條が扱っていない多くの地図を見ることが出来る

<sup>14</sup> 竹島問題研究会 前の報告書、地図2-2.1894年「韓国・日本・東中國圖 135ページ

<sup>15</sup> イ・ジンミョン 「独島、地理上の再発見」1999.176 - 231 ページ参照

<表1> 西欧製作図に見える 鬱陵島・竹島, 隠岐島

	番号	会 図 面	年代	所 蔵	青 山 島	鬱 陵 島			リ ア ン ク ル	隠 岐	出 典	備 考
西 欧 製 ア ジ ア 図 ・ 日 本 図	1	アジア図	1572	大阪大学 図書館	×	×	×	×	×	×	大 阪 大 Web1	Thommaso Porcacchi (ベネチアガン)オルテリウスの アジア図 (1570)を 簡略化したアジア全図
	2	インド付近図	1575	秋岡竹次郎	×	×	×	×	×	×	B:71	メルカトル (図法)
	3	日本図	1585 頃	フレンチェ 国立図書館	×	×	×	×	×		C:解説 10	手書・行基図、1585 (朝鮮 13)年、天正少年遣欧使 節)がイタリアを訪問した時 持っていた日本図をポルト ガル語へ翻訳した物
	4	日本図	1695	秋岡竹次郎 南蛮図書館	×	×	×	×	×		B:72 C:解説 15	ティセラ (アンドワブガン) <sup>16</sup> 銅版・浄徳寺・小林型日本 図がヨーロッパへ伝わり模 写された地図
	5	アジア図	1595	秋岡竹次郎	×	×	×	×	×	×	B:73	メルカトル図
	6	アジア図	1648	大阪大学 図書館	×	×	×	×	×	×	大阪大 Web2	ニコルス・サンソン (パリ刊)
	7	日本図	1646		×	×	×	×	×		C:解説 16	カルティム (ローマ刊) 地図は 1614 年頃完成 <日本殉教精華>所長
	8	中国・日本 近辺図	1650	秋岡竹次郎	×	×	×	×	×		B:74	プロエ <sup>17</sup> 隠岐の名前記載無し
	9	中国図	1650	秋岡竹次郎	×	×	×	×	×		B:75	プロエ <sup>18</sup>
	10	アジア図	1650	大阪大学 図書館	×	×	×	×	×		大阪大 Web5	ニコルス・サンソン (パリ刊)
	11	日本図	1660	秋岡竹次郎	×	×	×	×	×		B:76	サンソン <sup>19</sup>

16 イサンテ。「韓国古地図 外外外」へ収録された地図に基づきローマ字にする

17 行政自治部 国家記録源、前の本 7 ページによりローマ字にする

18 行政自治部 国家記録源、前の本 7 ページによりローマ字にする

19 カタカナになっているが図表 No.10 により筆者がローマ字にする

	12	アジア図	1670	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web7	ニコラス
	13	アジア図	1677	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web8	ピエリー デュバル(パリ刊)
	14	アジア図	1677	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web9	キラウメ サンソン(ローマ刊)
	15	日本図	1680	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		B:77	N.フィセル
	16	アジア図	1683	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web10	アラクシ・マネツ・マネ ット(フランス刊) 隠岐の知名無し
	17	大タルタル図	1683	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web15	ギアコモ・カンテリ・デ・ ビグソラ (ロシア刊)
	18	タルタル図 中国図	1690	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web17	コロネツ
西 欧 製  ア ジ ア 図 ・ 日 本 図	19	東亜図	1690	秋岡竹次郎	x	x	x	x	x	B	B:78	コロネツ
	20	日本図	1690	秋岡竹次郎	x	x	x	x	x		B:79	アラ図、朝鮮東部の日本海 地名の記載有り (判読不可能)
	21	アジア図	1690	秋岡竹次郎	x	x	x	x	x		B:80	オランダ(アムステルダム刊) 日本語地名表記も有る。 Cでは1720年頃作られた 石川流室の「日本海山潮陸 図」を翻訳
	22	日本図	1700	秋岡竹次郎 天理図書館	x	x	x	x	x		B:81 C:解説46	H・シール(ミュンヘン刊) 隠岐の記載無し
	23	アジア図	1703	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web19	ニコラス・デ・ファー (パリ刊)
	24	アジア東部図	1705	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web20	ハーマンモール (ロンドン刊)
	25	中国 日本図	1710	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web21	ヘンリ・チャタリン(アムステルダム刊) 日本地図はアソニウスの日本 地図(1650)を利用したに 間違いはない
	26	日本図	1719	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web22	ヘンリ・チャタリン(アム ステルダム刊)日本地図はアン ソニウスの日本地図(1650) を利用した物に違いない。
	27	日本図	1738	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web24	イッサティリオン(ベネ チヤ刊)ケンベルの日本 島XXの地図を根拠と する
	28	新中国図	1738	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web25	イッサティリオン(ベネ チヤ刊)マルティニ図系 統
	29	新タルタル図	1738	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web26	イッサティリオン(ベネ チヤ刊)
	30	ロシア タルタル図	1739	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web27	J・M ハス(コペンハ ゲン刊)中国部分
												1735年<康熙内部図> を基本に刊行したタ ンビルの地図に拠る

31	日本図	1740	秋岡竹次郎	x	x	x	x	x		B:83	ケンペル セツテル <sup>20</sup>
32	日本図	1740		x	x	x	x	x		C:p.26	ケンペル・セツテル 日本語地名表記無し
33	日本図	1744	秋岡竹次郎	x	x	x	x	x		B:84	E.ポエン
34	タルタル図	1745	秋岡竹次郎	x	x	x	x	x	x	大阪大 Web29	ガイランス・デ・レ ッレ(パリ刊) 東側は朝鮮半島まで
35	新アジア図	1745	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web30	イッサ・ティリオン (阿姆斯特ダム刊)マル ティニ図系統
36	日本図	1749	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web33	ギ・ル・ロベルト・デ・バ コンデイ(パリ刊) 日本本土はE.加ワア <sup>21</sup> 図。大陸部分は J.B.Bデ・アビレ <sup>22</sup> 図 に記載。
37	日本図	1750	秋岡竹次郎	x	x	x	x	x		B:85	イッサ・ティリオン <sup>23</sup>
38	日本図	1750	秋岡竹次郎	x	x	x	x	x		B:86	ロベルト
39	日本図	1750	秋岡竹次郎	x	x	x	x	x		B:87	コルテ
40	アジア図	1752	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web34	J.ギブソ(ロンドン刊) マルテの中国地図 (NO.10 参照)系統に属 する。隠岐知名無し
41	日本・朝鮮 半島図	18c 中頃	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web35	ジャクス・コヌバ リス(フランス水路学者)
42	日本図	1752	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web36	ジャクス・コヌバ リス(パリ刊)E.加ワア <sup>24</sup> の「日本史」の元と なった地図系統
43		1752?	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x	x	大阪大 Web39	パリ刊、地図作者の名 前無し、「英国地図の 模写」と記録してあ る
44	中国図	1755	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web43	エリアドレフイグデプレ トット(パリ刊・フランスの歴史・ 地理学者) J.B.Bデア ビレ <sup>25</sup> 系統。隠岐地名記 載無し

<sup>20</sup> <図表27>に基づくローマ字化、ケンペル(1651-1716)はドイツ人で、江戸時代オランダ商館付き医師であり、博物学者だった。1690年日本へ入国して日本の歴史・地理・風俗・動植物を研究した著書「日本誌」は没後に英語本(1727年)を始めとして各国語で出版され、当時ヨーロッパに於いて、日本研究の起源となった。「ケンペル江戸参府行(江戸参府旅行日記)」でも有名だ。

<sup>21</sup> カタカナになっているが図表 No.27 により筆者がローマ字にする

<sup>22</sup> カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

<sup>23</sup> カタカナになっているが図表 No.27 により筆者がローマ字にする

<sup>24</sup> カタカナになっているが図表 No.27 により筆者がローマ字にする

<sup>25</sup> カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

45	シベリア タルタル エルト 日本図	1755	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web44	グ・ウ・ハ・ルト・デ・バ・ゴン・テ イ(パ 刊)朝鮮等は J.B.Bデ・ア・ル・レ <sup>26</sup> 系統
46	中国領	1771	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x	x	大阪大	グ・ウ・ハ・ルト・ボツネ(パ 刊)フランスの地図 作家、技師) J.B.Bデ・ア・ル・レ <sup>27</sup> の
											アジア図 <sup>(1753)</sup> を踏襲 した北アジア地図
47	東北 アジア図	1772	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x	x	大阪大 Web47	グ・ウ・ハ・ルト・デ・バ・ゴン・テ イ(パ 刊)
48	中国図	1776	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web48	グ・ウ・ハ・ルト・ボツネ(パ 刊) J.B.Bデ・ア・ル・ レ <sup>28</sup> 型を中心とする地 図。隠岐の地名なし
49	中国 タルタル図	1779	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web49	グ・ウ・ハ・ルト・ボツネ(パ 刊) 中国と東北ア ジアを広範囲に描い たJ.B.Bデ・ア・ル・レ <sup>29</sup> 型 地図。隠岐の地名なし
50	中国 朝鮮 日本図	1786	大阪大学 図書館	x		x	x	x		大阪大 Web55	グ・ウ・ハ・ルト・ボツネ(パ 刊) J.B.Bデ・ア・ル・ レ <sup>30</sup> 地図踏襲
51	中国図	1788	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web56	グ・ウ・ハ・ルト・ボツネ(パ 刊) J.B.Bデ・ア・ル・ レ <sup>31</sup> 系統の中国地図
52	中国領 タルタル 朝鮮 日本図	1788	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web58	グ・ウ・ハ・ルト・ボツネ(パ 刊) J.B.Bデ・ア・ル・ レ <sup>32</sup> 系統の地図
53	中国 朝鮮 日本図	1788	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web59	グ・ウ・ハ・ルト・ボツネ(パ 刊) NO.49 の下半分 と殆ど同じ内容の地 図
54	日本図	1790	秋岡竹次郎	西	東	x	x	x		B:88	セーヤ
55	シベリア 中国領 タルタル 日本図	1794	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x	x	大阪大 Web62	ラマーチェ(パ 刊) シベリアから日本ま でを含む北アジア

26 カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

27 カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

28 カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

29 カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

30 カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

31 カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

32 カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする



56	中国周辺 海域発見地 図	1797	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x		大阪大 Web63	ラペリウス <sup>33</sup> (パ リ 刊) No.63~68はラ ペリウスの探検家ラペルス 伯爵が 1787 年に実 際に行った東アジア 海域の探検結果を記 録したもの。日本・ 朝鮮・ユクは J.B.B デ'アビ'レ <sup>34</sup> の地図を基 にした。四国・九州 は E. カム'ア <sup>35</sup> の地図 を利用
	オホーツク 海周辺発見 地図	1798	大阪大学 図書館	西	東	x	x	x		大阪大 Web70	ラペリウス(パ リ刊) 日本海北部分からオ ホーツク海にかけた 湾海図
58	中国図	1803	大阪大学 図書館	x	x	x		x		大阪大 Web74	
	日本図	1804	大阪大学 図書館	西	東	x	x	x		大阪大 Web76	作者不明(パ リ刊) 内容は J.B.B デ'アビ' レ <sup>36</sup> の地図を殆ど全 面的に踏襲
60	日本図	1809	大阪大学 図書館	西	東	x	x	x		大阪大 Web77	J・ベ'ン'カン(ロ ンドン刊) イ'キ'ウの地理学者 兼 出版業者、基本 的に J.B.B デ'アビ' レ <sup>37</sup> の地図系統に即 してはいるが本州北 部・蝦夷地の表現は グ'ウ'ル'ト'デ'ゴ'ン'テ' イ <sup>38</sup> の日本図と一致
	中国並びに 日本地図	1810	大阪大学 図書館	文字 判読 可能 <sup>39</sup>		x	x		x		大阪大 Web78

33 原文では La Perouse となっているがこれをラペリウスの名前表記の Laperouze に修正する。以下同一

34 カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

35 カタカナになっているが図表 No.27 により筆者がローマ字にする

36 カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

37 カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

38 カタカナになっているが図表 No.36 により筆者がローマ字にする。ところで No.36 では地図製作年度が 1749 年であり 1750 年とは差がある。

39 (o)表が有るので除く

40 カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

62	朝鮮 日本地図	1815	大阪大学 図書館	西	東	無色	無色	x		大阪大 Web79	J・トムソン(イェンバラ 刊) 伴の出版業 者。朝鮮はデアンブレ <sup>41</sup> 系統ではあるが日本 については NO.76~ 78 の地図と比較し て飛躍的な進展が見 られ、或る新しい資 料に拠る事は確か だ。
63	タルタル図	1817	大阪大学 図書館	x	x	x	無色	x		大阪大 Web80	J・トムソン(イェンバラ 刊)NO.79 と同じト ムソンの 新一般地図の 一枚。 中国本土はデ アンブレ <sup>42</sup> 系統。 蝦夷地・サハリはホロ ウ <sup>43</sup> の統合図 (NO 70) に拠る。北海 道 <sup>44</sup> を含んだ日本図 形は No79 と比較し て後退。
64	日本図	1835	大阪大学 図書館	西	東	無色	無色	x		大阪大 Web84	J&C ウォーカー(ロンドン 刊) 彫刻師、クリ ンゲル K・カプラー等 に基づいた所が多い。 日本の形は K・カプラーの地図より 正確だ。 <sup>45</sup>
65	日本図	1840	秋岡竹次郎	x	x	1	2	x		B:89 川上 (1966)	セボルト <sup>46</sup>
										p.12	
66	中国図	1844	大阪大学 図書館	西 図書名 無し	東	x	x	x	x	大阪大 Web85	ゲイム・ジョンソン(イェン バラ 刊) 地理学者 A.K ジョンソンが組 版家の兄弟とクンデ 刊行した地図の 1 枚。 ヨーロッパ列強の進 出よりも測量が正確 だ。中国領内部は段 々性格になったが内 陸部は当然デアン ブレ <sup>47</sup> の地図を踏襲

41 カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

42 カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

43 カタカナになっているが図表 No.56 により筆者がローマ字にする

44 蝦夷地(蝦夷島、北海道の昔の地名)と北海道を同じところへ書いてある

45 これら二つのケンペル名はカタカナとなっているが図表 27 により筆者がローマ字にする

46 崔? 祐、前の論文、1982、 290~291 ページに拠りローマ字にする。この名前は Philipp Franz von Siebold だ

47 カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

67	アジア図	1847	大阪大学 図書館	x	x	x	x	x	大阪大 Web86	ビクターレバッシュー(パリ刊)フランスの地理学者、中国内部についてはこの時代にも正確な地理的情報が無く継続デアンビ <sup>48</sup> 地図を踏襲している。	
68	日本 朝鮮図	1851	大阪大学 図書館	x	黄色	黄色	無色	x	x	大阪大 Web87	J・カウ(ロンドン刊)イギリス地図学者。ウオカの日本図 <sup>(No.84)</sup> <sup>49</sup> に拠る。朝鮮の形状はデアンビ <sup>48</sup> 形より変化したが現実性に欠ける。朝鮮半島は黄色に塗られている。
69	日本 満州 遷都図	1864	大阪大学 図書館	図書名無し	東			x		大阪大 Web90	ジョン・バロム(ロンドン刊)地図編集で世界的名声が高くバルトム家3代子息ジョン・バロムによる地図。日本とサハラの形は正確になったが朝鮮半島の形はむしろ悪くなった。
70	中国 日本全図	1865	大阪大学 図書館	x	x			x		大阪大 Web91	アドルフ・ルベック・ブル(パリ刊)フランス地理学者。1882年観光されたアヌエバーサル地理図のE・サンの改定版の1枚だと思ふ。
71	朝鮮図	1865 ?	大阪大学 図書館	x	x	x	文字判読可能	x	x	大阪大 Web93	フランスのカリクに拠る朝鮮半島全図(パリ刊)No.79とNo.87と比較して正確になった。
72	中国 朝鮮 日本語	1870	大阪大学 図書館	x	x	x	#3	#4		大阪大 Web94	オガスト・ピーターマン(コタカ)ドイツ地理学者が1817年刊行開始したナトアトスの改訂版の1枚。正しい意味での現代地図とはいえないが中国東部・朝鮮半島・日本が描かれている。松島の横に国境線が或る。

<sup>48</sup> カタカナになっているが図表 No.30 により筆者がローマ字にする

<sup>49</sup> カタカナだったが、筆者が見た図 No73 Waker へ換える

73	日本図	1872	大阪大学 図書館	X	X	点 線	#5	大阪大 Web95	E・ウォー(ロンドン刊)イ ン地図学者兼、組版 者兼、出版者。随 分、実際に近い日本 図では有るがシーボ ルトの日本の企画を基 本としたと考える。 シーボルトの日本(1832 ~54)に沿うべく長 久保赤水の「日本興 地路程全図」の図形 を採用した可能性 が高い。
74	中国 朝鮮図	1874	大阪大学 図書館	X	X	X	#6	大阪大 Web96	J・ジエカ(パリ刊) フランスの出版業者。中 国内部は当然テアン ビレ <sup>50</sup> 地図を 部分的に修正した だけ。日本につい てはとても正確な 地図となった。シー ボルトが翻訳、製作した 日本製地図を基礎 としているようだ。
<p>凡例文献(原文図表中の別添え)</p> <p>○: 絵図に記載あり X: 絵図に記載無し ( ): 写真では完全に確認できない</p> <p>A: 南波松太郎・宝賀信夫・海野一隆(1869) 「日本の古地図」創元社</p> <p>B: ?????? 編(1971) : 「日本古地図編集」鹿島研究所 出版会</p> <p>C: 中村チヨク監修(1972) : 「日本古地図大成」講談社</p> <p>大阪大 Web : 大阪大学附属図書館ホームページ電子展示・西洋古版アジア地図</p> <p>川上健三(1966) : 「たけ島の歴史地理学的研究」古今書現</p> <p>*1:(タカマ) (ブルグロン) *2:(マツマ)(テ マロズ)</p> <p>*3: マツマ *4: テアンコルト オナ</p> <p>*5: オナ *6: マツマ</p>									

<sup>50</sup> カタカナで書かれていたが、見た図30番について筆者がローマ字へ換える

上の<表1>では、先に既に指摘した所と同じ、優先分析対象となった地図の範囲から論じなければならない。分析対象となった地図の上限と下限を何故1572年アジア地図から始めて1874年に製作した地図までに決めたのかについて合理的説明が不足している。まず地図の上限を決めた物は日本の隠岐島と独島を結び付けるためのことなのか分からない。仮にそのような意図だったというなら、これは独島を隠岐島の付属島として設定しようとする試みだろう。だが、独島に関する問題は隠岐島が西洋人に認識されたのか否かは別に問題とならないといえる。

しかし、万一独島の認識のために、隠岐島についての認識が重要なら、何故重要なのかについて説明しなければならない。もし独島が隠岐島の付属島と認識されたと言いたいなら、これは明確に問題となる。

日本は1572年当時、独島についてはっきりした認識が無く、その後には明確に文章として独島が日本の領地では無いと宣言するまでになった。即ち1695年安龍福に明確に宣言して、1877年日本太政官文章等に、独島は日本とは関係の無い島であると何度も、次々と公言した。<sup>51</sup> 従って船衫力條が検討した74個の地図の中で、1番から37番までの地図は論外とするべきだ。特に26番の地図は隠岐島租借島と表示されていないのに、何故資料として提示しているのか解らない。これ以外にも独島が無い39・40・41・42・43・44・45・47・48・49・51・52・53・55・56番等の地図は除外しなければならない。従って独島関係で検討する地図は21個だ。結果的に船衫力條は論外の地図を資料になる地図よりも沢山列挙している。これは報告書の執筆者が論証資料として沢山の地図を提示しているような錯覚を誘導したこととして明らかに問題がある。

船衫力條自身も18世紀中期までは、西欧で製作された地図に隠岐島だけあって、今の??(鬱陵)島、“竹島”は表記されていないと報告した。一方で隠岐諸島は18世紀中期以降、大部分の地図に記載されていたと言った。<sup>52</sup> 従って、報告で筆者が除外しようとした地図を論外にしても文句はないだろう。彼は日本の地図の中には16世紀末に伝えられた福井の浄徳寺の所蔵、日本圖屏風、これと同じような系統の南蠻屏風や、「新撰大日本圖鑑」(1678)、石川流宜の「日本海山潮陸圖」(1691)等、江戸時代の日本圖を基として製作された地図もあるとしながら、前出の日本圖屏風・南蠻屏風には、隠岐と、高麗の間に“磯竹”と書いて今の鬱陵島が描かれているが、これらを基にした西欧地図には磯竹島が出てきていないと言った。<sup>53</sup> それならば独島を論じるにあたっては、この前の地図が別に助けとなる資料ではないのに図表の中に入れて、くどくどと言ったことを彼は自ら認めなければならない。一方、隠岐島が韓国の鬱陵島よりも早く西洋人の地図に出てきたと言って、それがそれ程重要な問題ではない。西洋人は西洋人の目的と必要に基づいて地図を作るからである。地理上の発見のために東洋へ進出し始めた西洋では、この時から地図製作に拍車をかけるようになるのは当然だ。

それゆえ、西洋の地図製作歴史を少し振り返ってみる必要がある。西洋で、地図製作は産業活動の一部分として国の経済が安定して、成長するとき生産、並びに消費が共に増加しながら活性化したという。

<sup>51</sup> 1876年(明治9)日本は中国の地籍を調査する作業を始めた。この時島根県は竹島((竹島= (鬱陵)島)松島(松島= (独島))を島根県の地籍に包含させるべきかどうかを内務省に問い合わせた。内務省は過去の文章を検討した結果、この2つの島は朝鮮領土であり、日本と関係が無いとの結論を出した。しかし問題の重要性を勘案し、内務省は付属文章を添付して、次の年1877年3月17日 国家最高機関である太政官に稟議書を提出して、最終決定を要請した。よって太政官は2つの島が日本と関係が無いと決定して内務省へ送り届けた。これを以って (鬱陵)島と (独島)が日本領土ではない事と確認、終結して島根県へ返信を送り届ける事で最終処理となった。(イ・ジンミョン「西洋資料で見た独島」17P) この他にも、保坂祐二 「日本地図が証明する韓国の独島領有権」「殉国」2005、36~42ページと、カン・マンギル、「独島はなぜ日本の土地ではないか」、「明日に続く歴史」4、シンソウォン( ) 2000、13-19 ページ、等多数の論文がある

<sup>52</sup> 独島問題研究会 前の報告書 132ページ

<sup>53</sup> 上の 注)参照

勿論 これは海外植民地並びに領土の獲得に強い意欲を持っていた国々であった。これらの国々では海洋産業とか海軍力がこれを支援した。のみならず総合科学でもあるといえる地図学の基礎となる地理学・天文学・数学・歴史学・測量学等の学問が地図製作産業と緊密に関連していた。

地図は本の形で出版される事となり、一枚一枚で出版物されることもあったという。一枚一枚で発刊される地図はおおよそ個人消費者が家庭や事務所に飾る為に購入した。この為に、このような地図は装飾効果を高める為に、地図の周囲にいろいろ、想像の動植物、異国的な風景等を描いて美しく彩色された場合が多いという。だが彩色だけが地図の価値を決定するのではなく、その地図が出版当時の新しい知識と情報をどれ位入っているのかがどうかであった。並びに組版と印刷状態、地図の希少価値等が地図の価値を判断する重要な要素であった。<sup>54</sup>

もちろん、地図製作産業も、このような総合科学技術・海軍力・海洋産業等の様々な要素に従って、その盛衰を異にしてきた。地図製作産業は中世末から地中海( )海上貿易と文芸復興が一番初めに興ったイタリアから始まったが、それほど好況を享受出来なかった。そうこうするうちに1492年アメリカ大陸発見以降、中東と東南アジア地域等に対する貿易を独占していたポルトガルへ地図製作産業の主導権が移った。ポルトガルは海洋王エンリケ(Henrique O. Navigator, 1394~1460)の登場と共に屈強な海軍力を基に、アラブ商船らが握っていた東南アジア貿易を掌握するためにアラブ勢力と衝突し、アラブ勢力を制圧した後、新しい航路を発見する事となった。この過程でポルトガルは自然に地図製作産業にかかわりながら、西洋古地図政策を先導するようになった。だが、エンリケ王が早く逝去すると同時に海洋大国の夢を引っ込めなければならなくて、地図製作産業の主導権同様に喪失した。

この後、文芸復興がアルプス北部へと広がりながら、政治、並びに経済が安定して、学問の水準が高まった北部スイスやドイツのニューデンベルグ側へ地図製作の主導権が移ることとなり、そこでも持続的に根を下ろすことが出来ず、当時、海洋貿易大国の夢を伸ばしていたオランダが主導権を握ることとなった。地図製作産業はオランダのアムステルダムとハーグ、そして同じオランダ語圏であるベルギーのアントワープ等を中心に好況期を迎えるようになって、17世紀オランダは地図製作分野の強者として君臨するようになった。この時期オルテルius(Abraham Ortelius)ブラウ(Blaeu)ホンディウス(Jodocus Hondius)ヨハネス・ヤンソニウス(Joannes Ianssonius)等と同じ有能な地図出版業、従事者達が重要な役割を果たした。これら出版業者は新しい地理的知識を効果的に地図に反映すると同時に装飾的価値も高く、消費者に相当な人気を享受する事ができた。

一方、フランスではルイ14世が統治した後から王室が地図製作産業を積極的に後援して、地図について消費者の関心を更に高めながら17世紀末から地図製作産業が好況期を迎えた。更にまた、当時フランスは天文学・数学等、自然科学の水準が高く海外善交を積極的に推進しながら、天文学者・数学者・水路学者等も地図製作へ参与して、18世紀地図製作の主導権を握ることとなった。一時、フランス地図測量学者達が極東ロシア地域測量にも参加して多くの成果を挙げることもなった。19世紀に入ると本格的な海洋国として登場した英国は強力な海軍力を前面に押し出して海外植民地構築へ積極的に出て地図製作に活力を吹き込むようになった。

地図製作業者達の数も増し、消費者の要求もまた、高くなった。もちろん、この時期英国の関心は主にアメリカ大陸、並びにアフリカ等にあった為、これらの地域の地図製作に一番重点を置いたが、香港を長期租借する等、アジアについての関心も高かった。ともに19世紀にはアメリカも屈強な海軍力と経済

<sup>54</sup> 行政自治部 国家記録源、2007 「西洋古地図を通して見た韓国(Korea in Old Western Maps)」、7~9ページ

力を前面に押し出し、地図産業へ乗り出すようになった。

しかし、19世紀後半、地図製作が産業化・科学化すると同時に、古地図製作者達だけが持っていた創意性が落ちながら、その役割も次第に衰退するようになった。このような時代的变化に従って19世紀後半から西洋の古地図は急激にその重要性を失う事となった。<sup>55</sup>

このような過程を経た地図は昔へさかのぼればさかのぼるほど地図を製作する人、自らがその地形や位置について正確な認識が不足しており、その上地図を製作する技術、即ち正確な位置に描き入れることができなかった技術上の問題点が伴う。また国家の領有権を確定するための地図なのか、単純に水路を調べるためであるのかどうかの製作するときの意図によってその地図表示が大きく変わることがある。<sup>56</sup> 従って西洋の地図に登場する問題はこれらの国々とはどれだけ直・間接的に関係があったのかという問題が大きくその可否を決定するようになる。場を異にして地図を検討しながら、韓国・日本両国間の西洋との関係を見るようだ。

したがって、上で既に指摘したように、船衫力條は地図全体の状況を考慮して結論を出さなければならないだろう。隠岐島だけの地図を除外する問題、また1870年以降の地図等を共に分析しなければならない問題等を検討して考慮しないならば、西洋で製作された地図を目的の為に取捨選択したという非難を免れる事は難しいだろう。

一方船衫力條の意図とは違って彼が作成しておいた図表から非常におもしろい事実が見つかったという点を指摘しておく。独島はその名前がどのように別々に呼ばれたにせよ鬱陵（ウルルン）島が描かれた地図にさらに多く登場しているが、隠岐島が描かれている所とは別に関係の無いという事実である。

船衫力條が検討した74枚全部の地図の中から隠岐島が登場する地図は62枚だ。その上1枚には、鬱陵島・独島・隠岐島どれも収録されていないので、これを除外させたなら、その比重は更に大きくなる。これと異なり、地図に独島が出てくるので本稿の史料で書く事が出来るといった21枚の地図の内、鬱陵島と言う名前だけある所は2枚だけだ。つまり、鬱陵島と言う名前が初めから無いならいざ知らず、鬱陵島が出てくる時は鬱陵島と独島はどんな名前と呼ばれるにせよ互いに同列になって登場するという結論になる。従って、これは西洋人も独島を鬱陵島と一緒にくっつけて認識した良い反証となるものである。これは、そうなる事が自然な事だろう。

今、地図を中心に独島がどのように表現されているかという点を調べようと思う。

### 3. 西洋地図からの独島認識

独島が西欧の地図にどのように現れたのかという事は西洋人がそれをどう認識していたのかを示す資料になる。従ってその地図がいつ誰によって製作されたのか、どんな資料を根拠に完成されたのかを知る事は重要だ。我々が西洋地図を見る時その島が存在するのか否かの可否と共に資料解析のために何種類かの前提が必要だ。

まず最初に地図が刊行された時点と西洋人の地理知識の水準が考慮されなければならない。イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ等過去ヨーロッパの国々の東アジアについての地理的知識は17世紀までは非常に不正確であった。特に我が国が島として表われていたり、我が国と日本が地図上に現れて

<sup>55</sup> 行政自治部 国家記録源、西洋古地図を通して見た韓国 (Korea in Old Western Maps)」2007, 7~8 ページ

<sup>56</sup> シンヨンハ・パクチュンヒョンの前の論文、211~212 ページ

いない場合が代表的だ。従って古い資料として特別な意味を持ってはいない。西欧人達の東アジアについての比較的正確な地理的知識は 18 世紀からだと言える。だからこの時期と地図が表記している事は非常に重要な意味を持つ。

地名の表記言語は地図の客観性、系譜を知るのに非常に重要だ。地名を中国音で表記しているのか、日本音で表記しているのかによって製作者の準拠知識がどこにあったのかを知る事ができるので領有権等を客観的に判断するのに重要な資料になり得る。また地図の製作背景及び用途も大変重要だ。地図製作時に参考になった従来の地図並びに地図製作時国際政治情勢、軍事的用途等として製作用途が明示された地図等は地図の信頼性と正確性を判断する良い根拠となる。<sup>57</sup> この指針を携えて西欧古地図を分析して見るようにする。

船衫力條は彼の報告書の中で「西洋製作地図についての分析」で地図に現れた独島に関する認識を 18 世紀中期までと、18 世紀中期～19 世紀初期、19 世紀前期、19 世紀中期～後期に分けて説明している。本稿では既に 18 世紀中期までは独島が認識されずにいたので論外と言わなければならない事を言及した事がある。ところが船衫力條の報告書 2 節では「19 世紀初期」と言う時代的下限を明かしているが、3 節では「19 世紀前期」と言う上限を提示している。ここから 19 世紀前期と初期はどのように区別されるのかが明らかではない。

従って本稿では彼が提示した図表によって分析され、鬱陵島 独島の西洋名が登場する 1797 年までを下限として分析して見る。だから本稿では 18 世紀中期～18 世紀末までを 1 つの単元として分析して見るが、1798 年の地図からは 19 世紀前期に包含されて分析した例とする。つまり、厳密に言うと 19 世紀前期の上限は 1798 年とし、これに続き 19 世紀中期・後期までとして分類して見る。その次に船衫力條が駆使した論理展開の方式によって船衫力條の解析を批判するようにする。

#### 1 ) 18 世紀中期～18 世紀末期の西欧古地図

前で述べた事と同様船衫力條の区分通り 18 世紀中期から 19 世紀初期に該当する地図はおそらく図表 1 の 27 番から 65 番までの地図が該当するだろう。この中で独島の存在の可否として直接論議の対象になり得る地図は 38 番と 43 番、46 番、50 番、54 番 57 番、58 番、60 番の地図 8 枚になる。しかしまさにこの節で「19 世紀前期」と言う時期と次の節の「19 世紀初期」と言う時期はお互いに重複になるので 19 世紀に刊行された地図 57 番、59 番、60 番を除外するなら、18 世紀中期から 18 世紀末期の間に刊行された地図は 5 枚になる。その中で朝鮮の地名が西欧式の名前で記載された 1798 年の地図を後回しにしたならば分析する対象になる地図は 4 枚だ。

ここに分析対象として見なそうとする地図には朝鮮半島東側に 2 つの島が描かれ、そしてそれぞれ Tchiang-chan-tao ( 千山島つまり于山島の誤読 ) Fanling-tao ( 鬱陵島 ) だと書いている。18 世紀中期の地図から Tchiang-chan-tao, Fanling-tao という地名表記が現れ、これは明らかに鬱陵島と独島である。ところが問題は于山島は西側に鬱陵島は東側に現れている点だ。船衫力條はこのような西洋古地図は 16 世紀中期朝鮮の「八道總圖」を基礎に製作された可能性があると考えた。そしてそれをダンヴィル(J.B.B.d'Anville)の影響と考えた。<sup>58</sup>

<sup>57</sup> 行政自治部 国家記録院、前掲書、4 ページ。

<sup>58</sup> 竹島問題研究会、前掲の報告書、133 ページ。



タンヴィル(1697～1782)はフランスの地図学者として、1735年中国に滞在したフランス人宣教師達が作った地図を基礎に中国全圖を製作、1737年に『中國新地圖帳』を刊行したと言うが、この地図は長期間に及んでヨーロッパで標準的な中国地図として利用された。<sup>59</sup> ダンヴィルの地図には特殊ないきさつがある。満州から中国と辺境地域を測量したフランスの宣教師達が「朝鮮全圖」を検討し自分たちの地図帳に収録して、漢字と満州語で地名を表示したこの地図の銅板を、当時フランスで中国関連の百科事典を編纂していた後アルド(Du Halde)神父に送った。後にアルド神父はフランス語に直した地図帳の製作を当時最も有能な地理学者だったダンヴィルに依頼し、ダンヴィルはこの地図の地名をフランス語に訳すと同時に研究を経て近隣の地域を含んだ「中国地図帳」を発刊した。<sup>60</sup>

彼は中国の「皇輿全覽圖」の中の朝鮮半島の部分を基本にして「朝鮮王國全圖」(Carte de Royaume de Coree)を作った。<sup>61</sup> その時に鬱陵島の「鬱」と言う字を「鬱(ハン)」と誤って読んだため「鬱陵島」の中国式発音である Fanling-tao で表記し、独島を指す于山島を于山島と正しく読めずこの中国発音である Tchiang-chan-tao と表記した。<sup>62</sup> そして鬱陵島、独島についてのこのような方式の地名表記が継続し繰り返されていた。これと同様に誤記された地名は1750年の「日本圖」にも現れている。<sup>63</sup>

ところが問題は船衫力條はこの「千山島」は独島ではないと主張している点だ。彼曰く、「千山島」が地図に収録された理由は「日本が江戸時代中期の「日本圖」と朝鮮の「八道總圖」と言う2つの地図を合わせて「1つの地図」を製作したために現れたのであって、島の帰属を現わしている訳ではない。」<sup>64</sup> と述べた。

韓国人はかつて独島を于山島または于山と呼んで来た。<sup>65</sup> そして16世紀から18世紀まで地図には于山島を鬱陵島の西側に描いてきた。16世紀後半の『東覽圖』の「八道總圖」及び「江原道」と18世紀前半の「朝鮮總圖」(『天下地圖』)、「與圖」等には独島が鬱陵島の西側にあることとして描かれている。また18世紀中頃に製作された『地圖』の「江原道」と『天下地圖』上の「江原道」には独島が鬱陵島の南西側に現れている。これは当時の韓国人達の鬱陵島についての認識が不十分であったためである。

独島が鬱陵島の東側に書き写されていった時期は独島が鬱陵島の東側に描かれる様になった安

<sup>59</sup> 竹島問題研究会、前掲の報告書、132ページ。一方、船衫力條は序文にダンヴィルの地図年代は1779年だとしているが、年代が自身の報告書の中でお互い食い違えばかりではなく、事実にも符合しない。

<sup>60</sup> 行政自治部 国家記録院、前掲書、10ページ。

<sup>61</sup> 李鎮明、前掲の論文、1999、128ページには1720年頃だとしているが、これは間違いの様だ。行政自治部 国家記録院編、前掲書9ページと同様中国全圖をまとめた時期は1737年と一致する。

<sup>62</sup> 李鎮明、前掲の論文、1999、128ページ、一方金 は行政自治部 国家記録院編、前掲書、9ページでこれと同様に既存の自身の学説を再確認しながらも中国では東海内に鬱陵島と千山島と言う島があると伝えて来た一説を紹介している。

<sup>63</sup> 竹島問題研究会、前掲の報告書、133ページ。報告者船衫力條はこの地図が韓国の国立中央博物館が発行した『行ってみたい我が領土、独島』にも収録されていると付け加えた。

<sup>64</sup> 竹島問題研究会、前掲の報告書、133ページ。

<sup>65</sup> これについては上と同様の論文が参照される。

李丙、「于山・竹島 名称稿」、『韓国古代史研究』ソウル、博英社、1976；金 、「前掲の論文、2005、1～43ページ；徐鐘學、「獨島・石島」の地名表記に関する研究」、『語文研究』139、韓国語文教育研究会、2008、39～62ページ； 、「朝鮮時代地図に表現された鬱陵島・独島認識の変化」、『文化歴史地理』8-1(通巻28)、韓国文化歴史 地理学会、78～101ページ； 、「鬱陵島・独島 名称の変化を通して見た独島認識の変遷」、『震檀学報』94、震檀学会、2002、29～54ページ；楊普景、前掲の論文、2005、7～46ページ。

龍福の渡日事件があった以降に現れたのだが決定的なきっかけは 18 世紀前半の鄭尚驥の「東國地圖」からだと考えられる。<sup>66</sup>この「東國地圖」は縮尺と方位が正確な大縮尺地図として約 40 万分の 1 縮尺の道別圖だった。以後からは地図に独島は鬱陵島の東側ではなく東南側に示されている。もちろん引き続き于山と呼ばれながらのことだ。従って一部地図で鬱陵島の西側に于山島つまり独島が収録されていた事は当時地図上の位置表示を誤ったと言う事ではないのか。鬱陵島以外に于山島と言う別個の島があったと認識していた事は確実だ。<sup>67</sup>

一般的に日本人達は地図で于山の大きさと位置が合わないので朝鮮時代の人々は于山（独島）を良く知らなかったと主張する。しかし地図を良く比較して見ると、独島の位置が 18 世紀までは江原道と鬱陵島の間に描かれているのだが、18 世紀後半からはこの于山と同じ名前の島が東や東南側に描かれ始めた。その後于山の位置について記録方法には変化がない。つまり韓国人達は以前から独島を認識していたが、その位置表示は 18 世紀後半になって正確に描かれ始めたと考えられる。<sup>68</sup> 従って船衫力條の主張は歴史的背景について研究なしに現れた絵だけを見て診断する総合的分析が欠如した主張だと言える。

## 2 ) 19 世紀前期の西欧古地図

まず、船衫力條は彼自身が駆使用する '19 世紀前期' の下限がどの時期で、どんな理由でその年代を下限として設定したのかに関する説明が明らかになっていない。また 19 世紀中期中非情に大きな変化も現れないので時代区分の画期点をつかむ事ができない。ところが船衫力條はこの時期の地図を下記の様に説明している。

19 世紀に入る直前から地図には Tchiang-chan-tao(千山島、于山島)を西側に置き、Fanling-tao(鬱陵島)を東側に記載した事以外に新たに Argonaut(アルゴノート)、タジュレ(Dagelet)が記載されるようになった。これらは全て現在の鬱陵島だ。繰り返し言えば、当時西欧の地図には現在の鬱陵島が 4 個も描かれていたのだ。

Argonaut(アルゴノート)、Dagelet(ダジュレ) が記載する様になった事は西欧の測量成果に基づいたのである。Dagelet(ダジュレ)は 1787 年フランスが発見し、Argonaut(アルゴノート)島は 1789 年イギリスが発見した。また Argonaut(アルゴノート)、Dagelet(ダジュレ)は彩色されていないので無人島、無主地だと認識していた事がわかる。当時の地図は伝統的な朝鮮圖と西欧の測量成果を総合して記載された。<sup>69</sup>

この引用文を通して見ることが出来る事と同様船衫力條の時期区分が明らかではない。従って、彼が何種の地図を分析対象と見なしたのかわからない。ところが彼がこの時期の特徴としてとらえた点を総合して見ると、彼はおそらく 19 世紀前期の範囲をリアンクールと言う名称が現れる以前までと設定しようとしたようだ。万が一この様な推定が事実だとするならばその分析対象になった地図は独島を発見してそれが地図に現われるようになる 1870 年に製作された地図まで遡るようになる。しかし 1870 年は決して 19 世紀前期ではないので彼の時代区分にはかなりの問題がある事を繰り返し確認することにな

<sup>66</sup> 、前掲の論文、91 ページ。

<sup>67</sup> 金 、前掲の論文、2005、12～13 ページの<図表 1> 参照

<sup>68</sup> 金 、前掲の論文、13～14 ページ。

<sup>69</sup> 竹島問題研究会、前掲の報告書、133 ページ。

る。

この段階について彼の主張は2種類だ。1つは西洋諸国が実際に東海を測量しながら鬱陸島をアルゴノートあるいはダジュレと命名する様になって、この過程から鬱陸島が1つの地図の中に鬱陸島、于山島、アルゴノート、ダジュレと言う4個の名前で表示された点だ。そしてここに色が塗られていない点で後回しにされて、西洋人達がここを無主地として認識したと言う主張をしている。

ところがこの主張の問題点としてはまず地図に無色は無主地と言う認識をする事が出来る。これはこの島の名前が命名された過程について検討が全然ないために生じた誤った主張だ。鬱陸島にダジュレと言う名前を付けたラペルース(Jean-Francois Galaup de Laperouse)艦隊は鬱陸島を発見した時この島で朝鮮人達が生活しているのを見て記録している。

我々は山の頂にヨーロッパの城郭とそっくり似ている城をいくつか見た。朝鮮人達の最も大きなこの防御手段はおそらく日本人達の侵入に備える事を意味した。このあたりの海岸は公開するのにとても快適だった。全く危険もなかった。この国は山が多く、気候はとても軽快だった様だ。ある谷間にはまだ雪が完全に溶けておらず、土は耕作には不向きな様に見えた。ところが家々があちこちにたくさん集落をなしていた。(1787年5月25日付 日記から)<sup>70</sup>

船衫力條の主張の中で2番目の問題としては于山島がつまり鬱陸島の別の名前だと主張した点だ。この様な見解が間違いである事は既に論文と資料を挙げて説明した事だ。<sup>71</sup> どの様に同じ国の人々が300年余りの間1つの島を2つの名前呼び地図の中に描き入れたと考えたのかにさいては理解するすべがない。そして鬱陸島をアルゴノート、あるいはダジュレと命名した事と同様国家や同一集団によって付けられたのではない。これは鬱陸島について選考する探査事実を知らないでつけた名前である。

これは西洋の古地図上に鬱陸島の地名がそれぞれ異なって表記されていたが訂正された過程を注意して調べてみるとはっきりと知ることができる。1787年5月27日世界的なフランスの探検家ラペルース(de Laperouse)が西洋では最初に鬱陸島を目撃してこの島を測量した自分の探検隊員であり数学、天文学者ダジュレ(Lepaute Dagelet)の名前を付けた。ところがラペルースが東海に立ち寄ってから4年後の1791年イギリスのコレット(James Colnet)提督の海洋資源探査船アルゴノート号が東海を探査した。この時コレットが鬱陸島を目撃したと考えられるが、この島は彼が立ち寄った次の1810年頃以降に発刊された西洋の地図に現れた。アルゴノート島の位置は江原道高城沖にあった。1815年に発刊されたトムソン(John Thomson)の「日本及び韓国」(Japan and Korea)では2つの国の内部地形と地名を非常に詳細に示した。この地図にはアルゴノートとダジュレが表示されている。しかしイギリス海軍の失策で地図上に登場したアルゴノート島はその実体に疑問が提起され始め、その島の位置も判明した座標にフランス(1852)、ロシア(1854)、イギリス(1855)艦艇等が直接行って確認した結果、実在しない島として判明し1860年以後の海図と地図からは消えてしまった。<sup>72</sup>

### 3) 19世紀中期～後期の西洋古地図

<sup>70</sup> 李鎮明、『独島、地理上の再発見』38ページ。

<sup>71</sup> 金、前掲の論文及び金 の前掲の論文参照。

<sup>72</sup> 、上の論文、128～129ページ

船杉力條が 19 世紀中期に設定した視点とその時期設定の根拠としては本文の内容によると、たぶん Tching-chan-tao ( 千山島 ) , Fanling-tao ( 鬱陵島 ) という名称が消えて鬱陵島に松島という名前がつく時を基準にして時期を設定したようだ。しかし、この時期に製作された分析対象の地図が何であるのかは、図表にはまったく表示されていない。しかし、ここで船杉力條が、まず注目することは地図に白い色で表示された島である。彼は ”68 番の「日本・朝鮮図」( 1 8 5 1 ) を検討して見ると 架空の Taching-chan-tao ( 于山島 ) が消えて Fanling-tao ( 鬱陵島 ) Argonaut ( アルゴノート ) Dagelet ( ダジュール ) 3 島が描かれていたが、Fanling-tao(鬱陵島)、Argo-naout(アルゴノート)は黄色、Dagelet ( ダジュール ) は無色にされていた “ と言いながら、これは、西洋人達が ” Fanling-tao ( 鬱陵島 ) Argo-naout ( アルゴノート ) は朝鮮領として認識し、Dagelet ( ダジュール ) は無人島、無住地として判断したということを見せてくれる ” と主張する。<sup>73</sup> ところで韓国は地図上に無色で表示された部分が無住地を意味していないうえに、あらかじめ、ダジュールの例を通して明白に調べてみた。

一方、船杉力條はダジュールを松島と表示することについて間違っただけとして見ている。それなのに、彼は鬱陵島に該当する西洋古地図の地名に関して図表を作成して行きながら説明している。ここで彼は鬱陵島についてはダジュール、アルゴノートなどの名称を全部表示しながらも、もともと日本式の地名で鬱陵島を呼んだ竹島、独島と称した松島という名称は、図表上に表示さえしなかった。これは鬱陵島・独島という朝鮮式の名称にだけ混同があって日本では早くから独島を認識していたのでこれと同じ混乱がなかったように見せるようにする効果をもたらすようにする。

図表には分析がないながらも船杉力條は鬱陵島を ( 竹島 ) つまり、竹島と言い、独島を松島と表記した日本地図の混同をシーボルト ( siebold ) の失敗だと説明している。すなわち、彼は ” 1840 年に製作されたシーボルトの日本図によって西欧地図ならびに日本地図の成果が合致して Argonaut ( アルゴノート ) は竹島、Dagelet ( ダジュール ) は竹島と表示するようになった。以後、西欧の地図にはこんな表記が一般化された。 “<sup>74</sup> と説明した。

ところが注意する点はシーボルトが日本をよく知らなかった外国人であって、日本地図を制作する時、錯誤を引き起こしたと見ることができないほどシーボルトは日本社会と、とても深い関係がある人物であった。江戸時代長崎のオランダ商館で暮したシーボルト ( 1 7 9 6 ~ 1 8 6 6 ) はドイツ人であった。<sup>75</sup> シーボルトは医学と博物学を勉強して 1 8 2 3 年 長崎の出島に到着して日本研究に努力しながら日本人患者を治療した。彼は、1 8 2 4 年長崎郊外に一種の私塾である鳴瀧塾を設立して高野長英、高良斎等々の日本の開化文人達を指導した。彼は、1 8 2 6 年に商館長の江戸参府に同行した。この後 彼は 1828 年に発生したいわゆる ‘シーボルト事件’ で次の年追放された。

しかし、彼の日本との因縁はこれが終わりではなかった。日蘭通商条約締結後である 1 8 5 3 年、長男アレキサンダーを同伴して再び日本に来た。彼が長崎に滞在する時交際していたソノギ( 其扇、日本名 タキ( 瀧 ) との間に、生まれた娘 イレ( 楠本 シモト イレ ) は、後に日本の最初の女医師になった。アレキサンダーは、イギリス公使館等で日本語通訳をして、1 8 7 9 年から 1 9 1 0 年まで、日本外務省で勤務した。<sup>76</sup>

<sup>73</sup> ( 竹島 ) 問題研究所、上の報告書 1 3 4 ページ

<sup>74</sup> ( 竹島 ) 問題研究会、上の報告書 134 ページ

<sup>75</sup> 独島問題において人々が混同したりするような人だと考え、ただ度が過ぎる William Joseph Sebald はもっぱら違う人として独島問題においてひたすら違った役割をしたことを強調しておく。『ウィリアム シーボルト(William J. Sebold)と‘独島紛争’の始発』、『歴史批評』71, 2006, 140~170ページ参照

<sup>76</sup> 百科事典マイペディア電子典版 日立 system and service』シーボルト 條、彼は『日本』『日本動物誌』『日本植物誌』

しかし、これよりもっと重要なことは彼が日本地図を製作したことが決して単純なことではなかったという点だ。彼は、別名‘シーボルト事件’の核心人物であった。この事件は1828年9月シーボルトが5年の任期を終えて帰国するとき、国家で搬出を禁止していた日本地図と徳川の紋様である葵の紋様がある服（紋服）を携帯していることが発覚し関係者達が処罰された事件である。

ここで、重要なことは地図である。シーボルトが江戸参府を担当するとき天文方であった高橋景保を知ることとなった。シーボルトは彼から伊能忠敬の「大日本沿実測図」(伊能島)を高橋景保が修正した縮図をもらった。そして 紋服は土生玄碩から贈物としてもらい受けた。1829年9月暴風雨が吹きつけた船の荷物からこんな物が発見され 大きな惨禍が起こった。高橋景保は逮捕され次の年獄死して、その他に多くの関係者達、特に洋学問を学んだ学者たちが処罰された。シーボルトはスパイの嫌疑をかけられ調査されてから1年後である1829年10月再渡航禁止を宣告され 海外に追放された。<sup>77</sup> しかし彼は再び日本へ来て、彼の子息たちは日本で暮らした。

一方、我が国(韓国)は「大日本沿実測図」(伊能島)を描いた伊能忠能、(1745~1818)を注目する必要がある。伊能忠敬、(1745~1818)は江戸後期の測量家であり、地理学者だった。彼は1800年実際にエゾ(蝦夷、今の北海道)南東海岸を測量した。この後18年にわたって日本全国の沿岸を測量した。彼は日本全図の製作中に病死したが、弟子たちが作業を終え、1821年『大日本沿海実測録』を完成した。忠敬の測量日数は3737日、測量距離は4万kmに近かった。<sup>78</sup> 天体観測地点数は1203箇所に達した。シーボルトは 実際に日本海岸を測量した伊能忠敬が描いた地図をもっていた人物である。それゆえに彼は朝鮮東海岸に2つの島があったという事実も知っていて鬱陵島が日本では竹島と呼ばれていて、独島が (松島)と呼ばれていたという事実は認知していた人間である。彼がまだ、西洋人達が独島を見つけ出す前だったために認知していた2つの島を鬱陵島と独島に順に付けるようになったのだ。ところがシーボルトが間違っって鬱陵島を竹島と言ったという説明はあまりにも単純すぎた思考であり史実の歪曲である。

実際日本は鬱陵島と独島について認識が不明確であり、したがってこの名称も変わっていた。ところが日本人達は序列する時一番良いものから松竹梅という順序で並べて呼ぶのが一般的であると言う。したがって日本は鬱陵島を竹島、独島を松島と呼んで、鬱陵島をもうこれ以上自国の領土とみなせる余地がないようになる頃から独島を竹島と換えて呼んできた。<sup>79</sup>

現在、最後に船杉力条は独島がフランスの捕鯨船リアンクル号により‘発見’され Liancourt(リアンクル)と表記された点について説明し、またイギリスの地図にはイギリス名 Hornet Island (ホーネット)と表記されている点を指摘した。こうするうちに 最終的には Dagelet (ダジュール)と Liancourt(リアンクル)2島が描かれるようになった過程を説明した。

ところが彼の分析で興味深い点としては、彼自身は国境が描かれる前の地図だけを分析したといいながら、筆者が先に提示した多くの地図を除外させた。そうしながらも 彼自身は“72番の1870年「中国・朝鮮・日本」(ドイツ製作)は今の鬱陵島をマツシマ(Dagelet I.)と表記して、その南東側にリアンクル(Hornet I.)、すなわち今の 竹島として描かれている。興味深いことは松島の西側に境界線が引かれて

『江戸参府紀行』等を書いた。

<sup>77</sup> 『百科事典マイペディア電子事典版 日立 system and service』シーボルト事件 條

<sup>78</sup> 『百科事典マイペディア電子事典版 日立 system and service』伊能忠敬條、かれは三郎右衛門、勘解由とも呼ばれて号は東河である。18歳の時下総佐原の伊能の家に養子として入り、酒造、米穀取引などに尽力して家運を大きく興した。この後村長として勤務した。1795年には家業に飽きて江戸に出て幕府天文方である高橋至時から天文、暦学、測量を学んだ。

<sup>79</sup> 前の論文、16~17ページ<図表2>

いるという点である。それゆえにこの地図は鬱陵島の西側を日本と朝鮮の境界として認識していたということがわかる。”<sup>80</sup> と叙述することによって独島が日本の土地であることを認定されるようにして図表分析を終えている。

すでに先に提示したとおりこれ以降たくさんの西洋地図には独島が朝鮮領であると表示されている。1875年サダハクデイ及び岸田キンコの「改訂 新撰 朝鮮全図」、1886年 森キンセキの「大日本海陸全図 付 朝鮮琉球全図」の部分図である「朝鮮国全図」、1894年 中国上海で製作された「朝鮮與地図」、1895年ドイツ人 フォン・オジオの「朝鮮全図」、1906年カルリの「朝鮮地図」等々独島を朝鮮領として把握していた例はいくらでもある。<sup>81</sup>

問題は船杉力條が地図分析の結果をこのように間違っ表示された一種類の地図に基づいて全ヨーロッパの地理学界が独島を日本領であることを認定したかの如く断定して文章を締めくくったという点である。そのあとで船杉力条條は韓国新聞の記事を反論することで自身の文章を覆いをして見えなくしていた。

船杉力條は2004年1月15日付朝鮮日報の記事を批判しながら独島を韓国領であると表記した1894年に製作されたフランス地図についてこのように反論している。

1894年 フランス 日刊紙 Le Petit Journal に収録された地図で「朝鮮・日本・東中国図」という表題が付いていた。韓国と日本の間に国境線をひいて鬱陵島と共に独島がL' Ouen-san (于山島) であると表記されていたと言う。漢陽大 教授は行線に明確な境界線を引いて独島領有権を明確にした地図が公開されたことは初めてのことで、国際的にも独島を韓国領として認定されたと言っていた。ところが、この地図を良く見るとL' Ouen-san(于山島)の位置は経緯度で見るときの今の鬱陵島に該当する。更に言うと、この地図の于山島という今の独島ではなく鬱陵島を指し示すのだ。今の独島の位置には何も描かれていない。19世紀末期の地図にしては当時の測量成果に基づかない古いタイプの地図だと言える。こんな間違いをすることは于山島=独島という前提をもって地図を見ているためであり、また地図史や地理学研究を基盤としないで地図を見る場合の重要な経緯度さえ確認しない、基本的な方法的間違いなどを背景としているように見える。<sup>82</sup>

上の文章から于山島の位置が違うという船杉力条の主張は子午線について十分な理解がなく、下した即断であると思う。上の地図はフランス地図だ。フランスは1884年全世界がイギリスのグリニッジ子午線を使用することに決定したにもかかわらず1911年までフランスのパリを中心とする子午線、すなわちパリ標準東経を使ってきた。<sup>83</sup> この経度は今日の数値に2度20分14秒を引いた値だ。例を挙げると、この地図より約3年後に出版されたダルレ(Ch.Dallet)は現在の東経124度11分と133度52分の間にある韓国の東経を122度15分と128度39分の間だとした。<sup>84</sup>したがって1894年に描かれたフランス地図をもって今日の子午線を基準にして独島の位置に島がないということは本当に真実と食い違うと思う。

現在ヨーロッパ人として東洋学の大家だったクルラップロス(Julius Heinrich Klapproth)が1832年

<sup>80</sup> 竹島( )問題研究会、前の報告書、135ページ

<sup>81</sup> 『独島、地理上の再発見』、1999、176～231ページ 参照

<sup>82</sup> (竹島)問題研究会、前の報告書、135ページ

<sup>83</sup> ,3 『西洋資料で見た独島』、26ページ これをパリ 標準東経であるとする。

<sup>84</sup> Charles Dallet( , 訳) 『韓国天主教会社』ソウル(パリ)、1980

日本人学者（林子平、1738～1793）の<sup>85</sup> 『三国通覧図説』を翻訳して出刊した本等も考慮されなければならない。この本の付録で追加した‘三国接洋地図（Carte des TROIS ROYAUMES）’には‘鬱陵島’と‘竹島’とは2島を描いた後‘竹島’下に‘韓国領（a la Coree）’だと書かれている。<sup>86</sup> クルラブロスは日本人の地図に基づいて三国の接洋を紹介した。これは、日本が独島を日本の土地ではないとはっきりさせた太政官文書より約40年前の日本人達の思考を見せてくれる地図がヨーロッパに紹介されているのである。そして西洋人の独島についての認識なのである。

#### 4．結びの言葉（結論）

今まで、筆者は船杉力條が書いた「西欧制作地図についての分析」を詳しく分析した。まずこの報告書は資料になる地図選択においてその基準が曖昧である。船杉は74個の地図を分析したが、そこに実際独島がある地図は21枚だけであって隠岐だけ登場する地図がたくさん含まれていた。たぶんこれとおなじ試みは独島を隠岐の付属島として説明しようとした試みだったと判断されるが、彼が作成した図表はむしろ独島は鬱陵島と同様に認識されていることを鮮明にさらけ出してくれている。

2番目、彼の研究においては国境線が海上に描かれる以前の地図だけを分析すると言いながらも地図の下限線を1874年と決めた。ところがこの年代は独島問題を研究するのに妥当性がない。なぜならば1874年以後に出てくる地図には1849年 独島を発見した西欧地図には独島が朝鮮領だと表示されているためである。したがってかれは必要ない地図をたくさん含めたり、実際に必要な地図を分析範囲から除外させるなどの行為によって、研究の対象となる地図を選択するのに任意的だったという批判を免れられなくなった。

3番目、船杉力條は独島を研究する為に西欧で製作された地図を分析しながら、実際この主題で出刊されている文献を読まなかった。かつて\_\_\_\_\_は西欧の地図や文書を通して独島問題を扱って著書と論文とを公表した。その外多くの学者達が鬱陵島と独島の名称の変化や地図分析をしてきた。しかしこのような研究が彼の研究からは全然検討されなかった。

最後に船杉力條は既存の研究を全く参考にしなかつただけでなく、地図が作成された経緯や目的、時代状況についての考慮を全然しなかつた。彼は、単に地図を図表と表示しておいてその地図について単純な叙述のみしただけで、地図の系統や地図を製作した国家が異なる点、及びその間の変化過程を明らかにし抜けないでいる。

本稿では、この報告書がもっているこのような問題点について分析を通して次のような結果を確認することができた。

まず第一に、船杉力條は朝鮮古地図で鬱陵島と独島の位置がお互いに変わったことを言いがかりとして当時朝鮮人が独島を認識できないでいたとこじつけるだけでなく、時には、鬱陵島と于山島がひとつの島であるにもかかわらず、この地域について朝鮮人達の地理知識が不足して于山島と鬱陵島で、それぞれ別の島として考えたと主張する。しかし、朝鮮人達は独島をずっと以前から認識してきた。独島の公式名

<sup>85</sup> 林子平（1738-1793）は江戸中期の経世論家として長崎に留学して海外事情も学んだ。ロシア南下を警告して、海防、蝦夷地地域開拓を主張した。『海外兵談』を著述して幕府に逆らって1792年板木、製本を没収された家宅軟禁をされたので、翌年家で病死した。蒲生君平、高山彦九郎と共に寛政3人のひとりである。（『百科事典マイペディア電子事典版 日立 system service』林子平 條）

<sup>86</sup> ， 行政自治部 国家記録院（員）編、 前の本9ページ

称は于山であって、一般の人達が呼ぶには岩の島と呼んだ。朝鮮時代に製作された地図に約300余年に渡って独島は于山という名前ですと認識されていた。単に17世紀まで地図には独島が鬱陵島の右側に描かれているとした。しかしながら18世紀中期に入ると\_\_\_\_\_の「東国地図」を起点として韓国では独島についての認識がさらに明確になって独島の位置は鬱陵島の西側から東側へ正しく修正された。勿論位置は修正されたが、独島は「于山島」という統一した地名ですと認識されていた。ここで「于山島」が独島だという事実はもう再論する余地がない。

2 番目に、西欧の多くの国々が東海に進出しながら鬱陵島と独島を色々な名前が異なるように命名したことだ。しかしこれは互いに異なる国の認識なのである。

3 番目に、統計的に独島が描かれた地図にはいつも鬱陵島が描かれていたという点に注意しなければならない。しかし概して隠岐島が載ったたくさんの地図に独島が表示されていないという点も注目する必要がある。これは、鬱陵島と独島が自然形態上で括られて認識されることをさらけ出すと同時に表示された地図が日本地図とは資料の系統が互いに異なる地図という点を示してくれている。

4 番目に船杉力條は白色で残した地域が無主地を表示すると信じることで鬱陵島や独島が無主地として認定されたとしたり、彩色されたところと互いに異なる領土であることを表したと主張する間違いを犯している。無色で残しておいた鬱陵島の例からこれを見ることができる。西欧で地図を製作するときには、はじめに探検するときの探検記をいっしょに残している。鬱陵島に到着したフランス人達は、鬱陵島をダジュールと命名しながらも韓国人達が住んでいることを記録しておいた。かれらはたぶん原住民たちが呼ぶ元来の名前があったことを知りながらも航海をするのに拠点を表示するために自分たちの便宜にしたがって地名をつけたのだと考えられる。彼らが地名を命名したとしてもこれを彼らの領土と宣言するのではなく進んでいく行路を記録しておくだけのことであったと確認できた。

5 番目に西洋人達が初期の地図を製作するときには自分たちが「発見」して命名した島の地名と、元来島々がもっていた地名を混同していて、これをそれぞれ別個の島として考えて、これをそれぞれ異なる島として地図に表示することもした。しかし次第に航海が進められ、この実体を把握するようになりながら、いつわりである島が消されることになった。そうして朝鮮の沿岸には鬱陵島と独島だけがのこることになって、大部分の地図はこれを明白に朝鮮領であると表示していることを記憶しなければならない。したがって、これは西欧人が独島を朝鮮領として認識していることを見せてくれているということだ。

以上で船杉力條の西洋地図を通して主張する独島認識についての文章を分析した。地図を分析する場合には地図上に現れる形態だけを注目した姿勢から抜け出さなければならない。この当時この地図を管掌した部署、地図が出刊されるとき国家の承認行為があったのかなどの可否を問い正し、地図の信憑度についての研究を一緒にしなければならないだろう。また、地図の制作経緯、朝鮮及び日本が結んでいた地図製作国との関係等を考慮して地図を解析して出さなければならないだろう。そして韓国と日本の研究者たちが地図をいっしょに調べながら比較して討論する機会を持たなければならないだろう。このすべての事柄を次の課題として持ち越す。